

笑わせることの考察（1）

～小沢昭一の変哲俳句を読む～ 土屋泰山

手許に俳優小沢昭一（一九二九～二〇一二）の『俳句で綴る変哲半世紀』（岩波書店二〇一二刊）がある。生前の四千句が収められている。彼は俳優としてだけでなく、ラジオでも業績を遺した。「小沢昭一的こころ」（TBSラジオ 一九七三～二〇一二）には、私も笑ったものだ。また、「日本の放浪芸」（白水社 二〇〇四年刊）では芸能を自ら採録して遺している。

私は大学時代、二松學舎大学で近世文学（井原西鶴）を専攻したが、研究主任教授は青山忠一先生だった。この方が、小沢昭一と早大同級生で、加藤武らと戦後「落語研究会」を作ったので、親しみを抱くようになった。

また、三十年ほど前、地元の千葉市で講演会を聞いたことがある。壇上で、演壇の花瓶の花を無言で凝視した後、暫くして口を開いた。たった一言、「綺麗です」。話術の神様に出会えたことも懐かしい。

さて、生涯の四千句の中から句を拾うのは無謀だが、今回十句を取り上げたい。
毛虫持て女性徒逃す子でありき（一九六九）

好きな子を泣かす意地悪。私にも内緒の思い出がある。純粋な思い。笑顔にならざるをえないなあ。

よしきりを聞く朝手淫中止せり（一九八八）

男子にはうなづかれる方もある。「手淫」なる言葉は今は死語。しかし、それで何処となく恥じらいを醸している。その顔に思わず笑ってしまう。

虎造を寝てイヤホン春の風邪（一九九四）

話芸の至極である浪曲の虎造節。体調不良の時、それを耳にして極楽に浸る世界を彷彿させる。とする。虎造の声は心休まるものだから。

蚊を打って手を合わせてる俺となり（二〇〇四）

小沢氏は晩年、病と共に存していた。そこはかとない優しさと江戸っ子の照れが

見える。

何はさてガン宣告後のとろろ汁 (二〇〇八)

重い「ガン宣告」と「とろろ汁」の軽み。さらりとした世界の中に「平気」が見える。

着ぶくれて歩幅短く家路坂 (二〇一一)

住まい近くの坂道。着ぶくれがふらふらしている姿が、只々可笑しい。目に浮かぶ。

もう余禄どうでもいいぜ法師蟬 (二〇〇七)

余録ではなく「余禄」。儲ける欲よりも、好きなことだけしたい思いを「つくづく」語る。その姿に思わず頷くのは私一人か。

寒月やさて行く末の丁と半 (二〇〇三)

博打の言葉。次郎長伝の虎造節ファンの小沢氏ならではの表現。寒月を見上げて運を天の計らいに委ねる思い。夏目漱石の「則天去私」に通じる。「丁と半」との表現が、庶民的な江戸っ子の姿のやせ我慢に映って可笑しい。

なまいきに懐手して塾通い (二〇〇五)

幼少時、外でめんこ打ちなどに興じた小沢少年には、塾通いする子どもはちはど腹立たしい。江戸っ子の瞬間湯沸かし器が見える。「懐手」が光る。

おがっっちゃやこれわらびかやんだんだ (二〇〇五)

ひらがなだけの表記が、読み手を引き寄せる。声に出してみると、方言の会話だ。方言のやりとりが理屈なしに可笑しい。